

第 I 章 序 言

この報告書は、平城京左京七条一坊十五・十六坪において、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1994年度に実施した、第251次、第252次、第253次、第254次、第255次調査の結果をまとめたものである。

1 平城京の発掘調査

A 左京七条一坊十六坪の調査

1980年代のバブル経済の崩壊後、平城京域における開発工事は奈良市などが行う公共工事を除いて急速に減退し、同時に事前の発掘調査も減少した。当調査部においても1986～89年に実施した「そごう百貨店」建設工事に伴って長屋王邸・藤原麻呂邸を発見してからのち、京域での大規模な発掘調査にたずさわっていない。

奈良市の南郊に当たる国道24号線の沿線では、旧24号線のバイパスとして開設して以来、大型小売店舗・流通倉庫・郊外型レストラン・簡易ホテルなどが徐々に進出して水田地帯を蚕食しており、現在でもその趨勢はとどまっていない。94年度に当調査部が発掘調査を担当した調査地域もそうした大型小売店舗新築に伴う開発工事に関わるのもで、奈良時代の東一坊大路を南下してきた国道が約120 m 西へ移行し、北東から南下する佐保川と交差するあたり、奈良盆地東西線のほぼ中央に当たる低湿地に位置する。

開発対象の敷地総面積は約31,500 m²、その範囲を遺存地割によって確かめてみると、左京七条一坊・七条二坊・六条一坊・六条二坊にわたることが明らかになり、駐車場など地下遺構に影響を及ぼさない範囲を除き、しかもできるだけ1坪全体を発掘するという意図のもとで、七条一坊十六坪を中心とする地域で約14,000 m²の調査地を選んだ。

調査地の南に佐保川が流れる低地に位置することから、洪水などの氾濫で奈良時代の遺構がすでに流出していることも予想され、事実、東一坊大路と六条大路が交差する調査区東北隅あたりの試掘では、中世以降の大規模な氾濫の痕跡が認められた。しかし、十六坪では保存状況がかなり良好で、厚さ約1 mの堆積土をのぞいて奈良時代の遺構を検出した。

これまで、発掘調査例や地勢によって、京域を南北にほぼ二分する五条ないしは六条大路以北が1町以上の宅地を占拠する貴族の邸宅の区域であり、それ以南が坪内を細分した下級役人などの小住宅が集合する地域であると考えられてきた。しかしながら、十六坪では1坪という広い敷地の利用状況が明らかになった。発掘調査時には東一坊大路西側溝から埴堀などの鑄造関係の遺物を発見していることから、鑄造関係の工房跡あるいは工房を管理する役所ではないかという説も提起されたが、敷地内には工房の存在を伺わず遺物が出土せず、住宅とする見解が強くなった。その解答については本文中で明らかにするであろうが、条坊地割内に散在する宅地の様相については、それぞれの地域によってかなり大きな違いがあり、京域の住み分けについて一定のルールを設定するには、まだ実例が不足していることを改めて認識させられた。

B 平城宮跡における発掘調査と整備事業

この場を借りて、最近の平城宮跡における発掘調査と整備事業の要点について簡単に触れておこう。1993年度までの動向については『平城宮発掘調査報告 XIV』で述べており、ここでは94～96年の事業が対象となる。

平城宮跡の
発掘調査

発掘調査 西面中央門である佐伯門内で右馬寮の遺構を検出した。東西を掘立柱塀で区画するほぼ中央に正殿を置き、それに西脇殿と後殿がともなう。この状況は佐伯門内の北側で明らかになっている左馬寮と酷似し、南方に馬場・馬房が展開する右馬寮の北郭にあたるものと想定した(1994年度調査)。

東方の遺構展示館に隣接する駐車場整備のため、造酒司の南区域を発掘した。造酒司南面築地と南門を検出し、造酒司敷として一辺約120 m(400尺)の方形区画が想定できた。なお造酒司の南には幅約20 mの宮内道路が東西に延びる(1995年度調査)。

第二次朝堂院において東第六堂・南門・南面築地を発掘して、第二次朝堂院の全貌が明らかになった。下層遺構として奈良時代前半の掘立柱朝堂・南門・南面塀があり、うえに奈良時代後半の礎石付瓦葺き朝堂・南門・南面築地が重なる。ただし、上層の東面築地は南に延び朝集殿院を囲むが、下層の掘立柱塀は南に延びず、部分的に調査区を拡張した東朝集殿北辺でも下層朝集殿の遺構を認めていない(1995・1996年度調査)。

1980年以来の調査によって、壬生門内の東側に式部省と神祇官があり、神祇官の東面築地に接して東側に官衙ブロックが予想された。発掘の結果、北面に正門を開く官衙が奈良時代を通じて存在し、平安宮を参考にすると神祇官の東院になる(1996年度調査)。

朱雀門の
復原

朱雀門・東院庭園の復原整備 1993年度の補正予算によって、朱雀門(総額36億円)・東院(総額20億円)の復原整備費が計上された。朱雀門については92年度に基壇の整備が終了しており、建築本体の復原が中心となる。基本的には伝統的な木造建築として復原するのだが、建築基準法に基づきいくつかの強度補強が問題となり、ところどころに現代技術による補強を大幅に加味することになった。阪神大震災の影響などによって工事の遅延が余儀なくされたが、97年度中には完成する。

東院庭園については園池付近の調査を完了していたが、南面大垣及び園池の西方区域については発掘調査が及んでいなかったため、工事前の発掘調査から始まった。その結果、南面大垣で奈良時代後半の宮城門を発見するなど、新しい所見に基づいて設計変更を行った。また未買収地が残るなどのことから、工事は遅延せざるをえず97年度の完成を期している。

復原研究の
進展

第一次大極殿院の復原研究 第一次大極殿院の復原研究は1989年度から特別研究として基礎調査を開始し、基本設計の段階に立ち至っている。土質・地耐力など各種立地条件にともなう調査を行うとともに、主として意匠を検討するために全域の1/100・大極殿の1/10模型を製作した。また柱・桁・梁・斗拱など木構造の耐震性を検討するため実物大の柱を立てての実験、コンピュータを活用しての構造力学的なシミュレーションも進めている。本格的な復原工事に際しては構造上の問題もさることながら、後殿遺構の直上を通過する通称一条通りの移設など、着手前に解決を必要とする問題が山積しており、今後は奈良県・奈良市など関係機関の協力が強く要請される。

2 報告書の作成

本報告書は、(仮称)ダイエー奈良南店新築工事に伴って、平城京左京七条一坊十六坪を中心に、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、1994年度に実施した第251次、第252次、第253次、第254次、第255次調査の報告である。

以下、発掘調査の責任者(所長・部長)と発掘担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。調査組織

次 数	所 長	部 長	発掘担当者
第251次	田中 琢	町田 章	浅川滋男
第252次	田中 琢	町田 章	内田和伸
第253次	田中 琢	町田 章	長尾 充
第254次	田中 琢	町田 章	岩永省三
第255次	田中 琢	町田 章	加藤真二

白杵勲、小澤毅、小野健吉、岸本直文、小池伸彦、小林謙一、杉山洋、高瀬要一、巽淳一郎、館野和己、玉田芳英、寺崎保広、毛利光俊彦、山岸常人、山崎信二、渡辺晃宏、(三重県教育委員会—船越重伸 東京大学—久保憲一、山之内誠 京都大学—福田美穂 奈良大学—岩崎大介、亀山直樹、小西寛之、高木克彦、望月英史 天理大学—井手正人、木下満代、永田朋子、長田美奈 京都橘女子大学—中村幸代、中山玉生 敦賀女子短期大学—清水由利恵)

報告書の作成は、1995年から2ケ年計画でおこなった。遺構関係の整理は遺構調査室と計測修景調査室があたった。遺物の整理は木製品・金属製品・石製品等を考古第一調査室、土器類を考古第二調査室、瓦埴類を考古第三調査室が分担し、木簡と墨書土器については史料調査室が担当し、歴史研究室が協力した。

本報告は、各執筆者が遺構、遺物を整理検討し、1995年12月から計7回、執筆者を中心とする検討会の討議を経て作成した。

本書の執筆担当者は次のとおりである。

第I章 1 町田 章 2 小林謙一

執筆・協力

第II章 1・2A・3・4 小林 2B 内田和伸

第III章 1・2 内田 3 長尾 充

第IV章 1 岩永省三 2 玉田芳英 3A・B・C・D 4 白杵 勲 3E 5 加藤真二 6 館野和己
7 松井 章

第V章 1 中野益男(帯広畜産大学)、中野寛子・長田正宏(ブコーシャ総合科学研究所) 2・3
パリノ・サーヴェイ株式会社 4 肥塚隆保

第VI章 1 内田 2 長尾 3 岩永 4 玉田 5 白杵 6 館野 7 加藤 8 小林

英文要旨 Edward Walter (天理大学)

樹種の鑑定は光谷拓実、ガラス・鋳物の分析は肥塚隆保があたった。また、金属製品、埴埴の分析調査には、辻本与志一、降旗順子の協力を得た。

写真撮影は佃幹雄と牛嶋茂が担当し、杉本和樹、楠本真紀子、妹尾由佳、森本佐由理の協力

を得た。ただし、第V章に使用した写真は、各執筆者が撮影した。

図面・挿図・表等は各執筆者が作成し、以下の各氏の協力を得た。

石塚美恵子、今津朱美、上田元子、浦田智子、大日節子、小倉依子、置田弥生、鎌田礼子、木ノ下淳美、北野陽子、笹 恵子、杉本陽子、高橋順子、高見ます子、長尾朱美、長谷川陽美、南本 忍、宮崎美和

本書では、引用・参考文献において、頻出する機関名・書名については、シリーズ番号等を除き、以下のように略した。

機関名

奈良国立文化財研究所：奈文研
奈良県教育委員会：奈良県教委
奈良県立橿原考古学研究所：橿考研
奈良市教育委員会：奈良市教委
滋賀県教育委員会：滋賀県教委

書 名

平城宮発掘調査報告：平城宮報告
奈良国立文化財研究所年報：年報
平城宮跡発掘調査部発掘調査概報：平城概報
飛鳥藤原宮発掘調査概報；藤原概報
平城宮発掘調査出土木簡概報；平城木簡概報
奈良県史跡名勝天然記念物調査報告：奈良県報告
奈良県遺跡調査概報：奈良県概報
奈良市埋蔵文化財発掘調査概要：奈良市概要

本書の編集は平城宮跡発掘調査部長町田章の指導のもとに、小林謙一がおこなった。